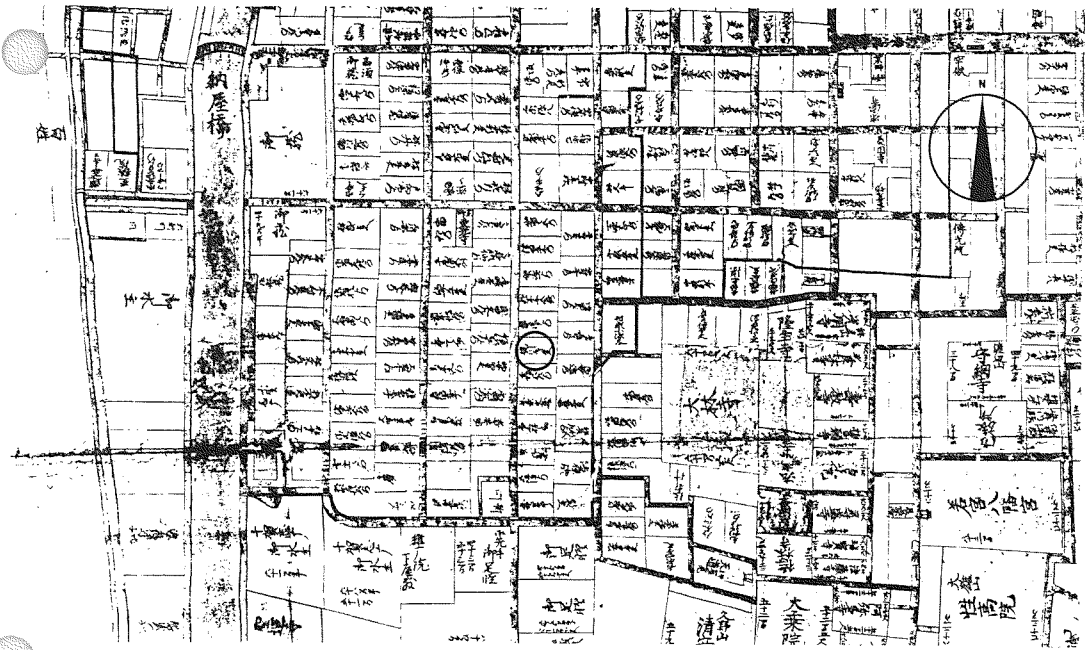


名古屋市中区栄一丁目

# 竪三蔵通遺跡

— 第10次調査の概要 —



1991

名古屋市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、名古屋市中区栄一丁目23番に所在する<sup>たてみつくらどおり</sup>「竖三蔵通」遺跡の第10次発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、名古屋市教育委員会が実施し、名古屋市見晴台考古資料館学芸員野口泰子、伊藤正人、水野裕之が担当した。
3. 発掘調査は、約500m<sup>2</sup>を対象に、平成2年10月8日から同年12月8日まで行った。
4. 発掘調査の実施にあたっては、名古屋市消防局総務部総務課、名古屋市中消防署総務課および同消防署員の御協力を得た。
5. 調査の記録、出土遺物は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
6. 発掘調査、および本書の作成に関して以下の方々の御協力、御教示を得た。記して謝意を表する。  
荒堀裕巳 大橋康二 小林克 鈴木忠司 (五十音順、敬称略)
7. 本書は、調査担当者の協力を得て水野が作成した。



## 目 次

I	はじめに	
	(1) 位置と環境	1～2
	(2) 調査の経過	2
II	遺構と遺物	
	(1) 古墳時代	3～4
	(2) 江戸時代	5～8
III	まとめ	9～10



— 表紙図 —

尾府名古屋図〔宝永6（1709）年写〕部分

（名古屋市蓬左文庫所蔵複製より）

〈丸印は、調査地付近〉

# I はじめに

## (1) 位置と環境



図1 遺跡位置図（5万分の1）

竪三蔵通遺跡は、戦前、戦後を通じ、都心部の一面をなす地域に位置している。名古屋城から南へ伸びる台地は、更新世の中位段丘であり、熱田層と呼ばれる水成層から成っている。したがって、当遺跡を含め、市内の台地上に立地する遺跡の多くは、この熱田層を基盤として残存している。

当遺跡は、これまでに9地点（9次）の発掘調査が昭和58年以來行われてきた。その結果、旧石器時代から近世におよぶ各期の遺物・遺構が検出されている。特に、古くは、名古屋の縄文文化以前の様相を知る数少ない資料を提供しているのに対し、近世では、名古屋城下町を物質的な資料から分析することが

できる。また、古墳時代では、竪穴住居跡や土師器、須恵器などの資料も多く得られている。このような、各期に渡る複合遺跡として、南側に隣接する旧紫川遺跡や、東側の白川



図2 調査区位置図（1：500）

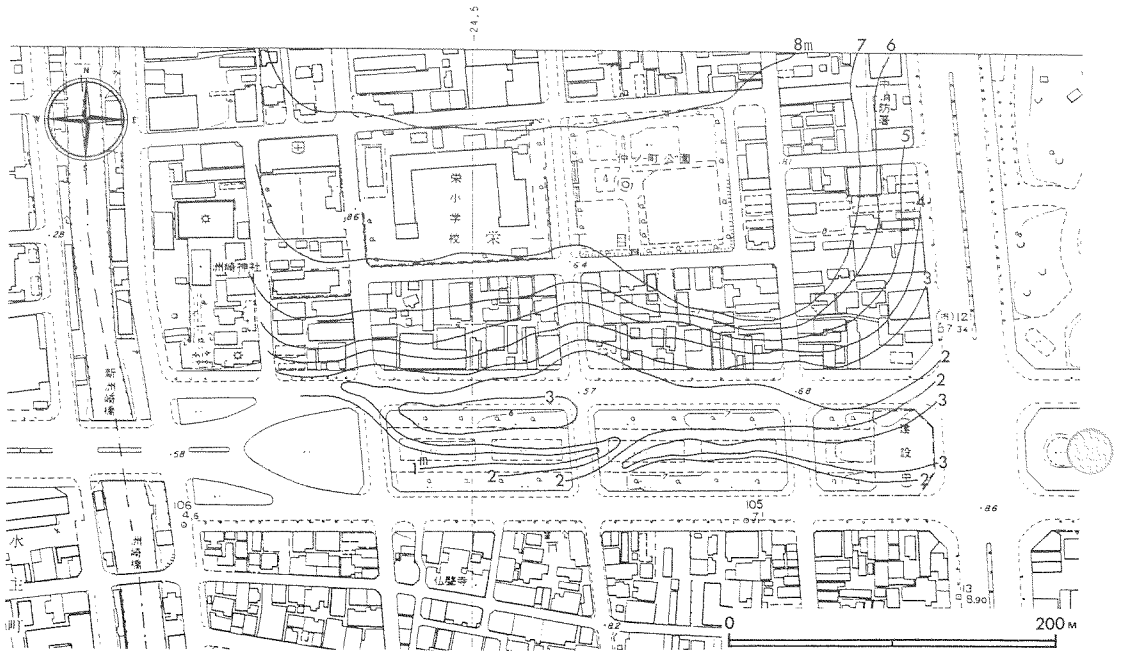


図3 遺跡付近の熱田層上面地形推定図〔等高線1～8mは、標高〕

公園遺跡と共に注目される遺跡である。

図3は、これまでに調査した豎三蔵通遺跡と旧紫川遺跡の熱田層検出面を元にして作成した概略的な図である。豎三蔵通遺跡の東側と南側は、谷地形となっており、北からこの谷を通過して洲崎橋付近の堀川へ流れた「紫川」は、江戸時代の城下町形成に伴って整地され、石垣などの護岸整備が行われてきたものと思われる。豎三蔵通遺跡では、5次調査、9次調査などで、17世紀には谷地形に土を入れ整地していることが判明している。現在では、表面がアスファルトやコンクリートで被われている地域であるので、古地形を想像するのも困難な状況となっている。

## (2) 調査の経過

市消防局の中消防署改築計画に伴う今回の発掘調査は、建築計画および、現在の消防業務との関係から、敷地西側の駐車場部分の半分程度を第10次調査区として行った。調査面積は、約500m<sup>2</sup>で、期間は、平成2年10月8日から12月8日までであった。表土層（近代以降の盛土や整地土など）は、熱田層面まで達している部分が多く、処々に、大きな瓦礫の廃棄土坑がつけられていた。遺物包含層は、南東部に古墳時代の土師器片等を含む黒褐色土が一部分残存したが、これは、遺構埋土を主体とするものであった。

発掘作業は、11月21日までの遺構埋土掘削作業後、クレーン車による空中写真撮影を行い、測量図化を委託した。現在、調査地は、消防署駐車場に復旧している。



写真1 調査風景

## II 遺構と遺物

調査区で検出された遺構は、古墳時代の竪穴住居跡、同時代のピット、江戸時代以前の可能性がある土坑、江戸時代の土坑、地下室(穴蔵)、井戸、柱穴などがある。出土遺物は、それぞれの遺構内から検出されたものがほとんどである。近世に屋敷地となっていたためか、古墳時代頃以降の土層は、ほとんど残存せず、古墳時代の遺構も部分的に検出されている状況である。以下、各時期の遺構と遺物の一部を記す。

### (1) 古墳時代

SB01 調査区の南東端で、黒褐色土の埋土を有する竪穴住居跡と思われる北西隅部分(SB01-A)が検出された。住居跡は、幅約20cmの周溝を有し、周溝底部には、多くの小ピットが存在して

いる。SB01-Aは、その内側にも住居の隅部分(SB01-B)が検出され、2軒の重複あるいは、SB01-Bの拡張かと思われる。住居跡埋土の観察から、SB01-B(古)→SB01-A(新)という新旧関係を得た。また、土師器高



坏坏部と台付甕台脚片が

写真2 SB01

出土した土坑（SB01-K）は、SB01-B埋土を切ってつくられていることから、SB01-Aと同時期かそれ以降のものである。SB01-Aの床面付近からは、S字状口縁台付甕D類（赤塚氏分類）にあたる破片が出土したほかは、土師器高坏片などが少量であった。SB01-Bの埋土からは、土師器高坏片と石製模造品の白玉などが出土した。SB01-Aの埋土上半層からは、須恵器甕片、同甕？片も1点ずつ検出されている。

ピット 比較的浅いピットが、数箇所検出された。黒褐色を呈する埋土からは、土師器高坏片や甕片が検出されており、P5では、須恵器高坏片も出土した。ピットは、柱穴を思わせるような深いものや、配列を示すものを検出していないが、調査区の南側および西側の熱田層上面が残存しているところでは、ピットが少数ながら検出されているので、調査区周辺にも遺構が分布するものと思われる。



写真3 P5遺物出土状況

一部では、江戸時代の整地土中に黒褐色土がブロック状に含まれ、近世遺構の埋土にも、須恵器片や土師器片が混在しているものがある。

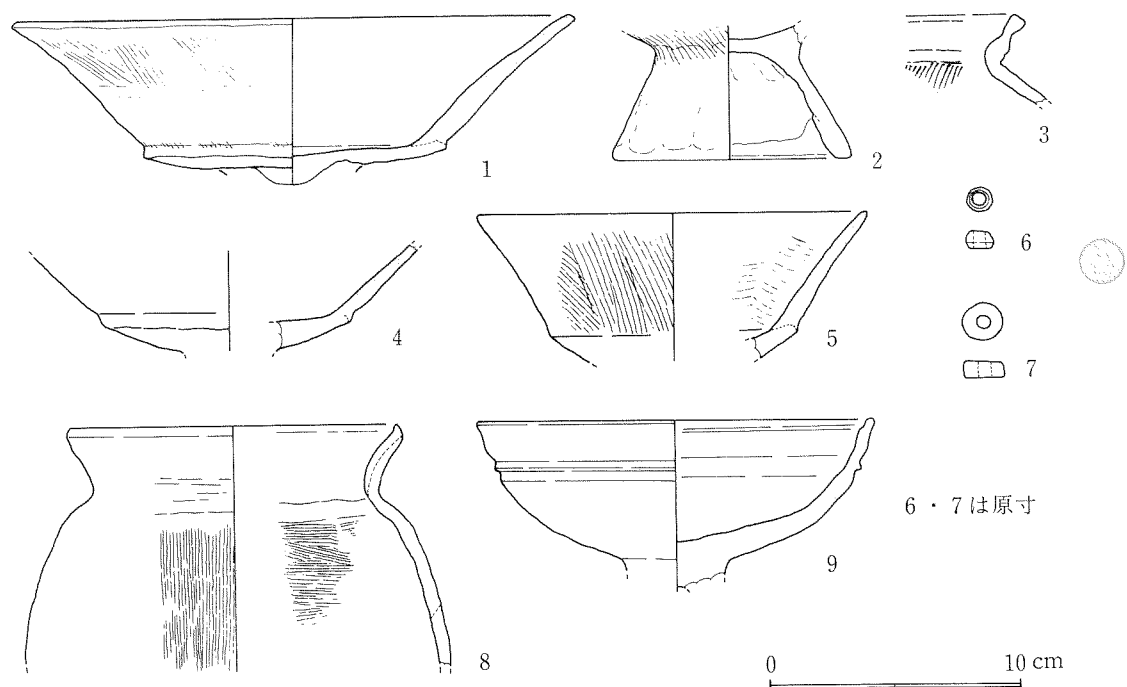


図4 古墳時代の遺物〔1,2はSB01-K。3,4はSB01-A。5~7はSB01-B。8,9は、P5より出土。〕

(2) 江戸時代

SK01 (6 LGr.) 平面形は、長方形 (約 1.4 m×約 1.8 m) を呈する。底部は、未掘のため、深さや下部の形状は不明であるが、調査時の掘削底面より、さらに 1 m 以上埋土が堆積しているようである。遺構検出面 (熱田層面) から約 1 m 下位あたりでは、遺構壁の北側が、やや袋状を呈している。壁面となる熱田層は、硬く締ったシルト層や砂層である。埋土は、ブロック状の土を含み、人為的な堆積を示す。

出土遺物は、17 世紀後半から 18 世紀前半頃の陶磁器、かわらけ、瓦、砥石などがある。陶磁器には、瀬戸、美濃陶器、肥前系陶器、肥前系磁器、中国製染付磁器などがある。数量化していないが、碗類については、在地産の瀬戸、美濃製品が少ないようである。当遺構は、形態などから、地下室 (穴蔵) としてつくられたものと思われる。



写真4 SK01 (6LGr.)

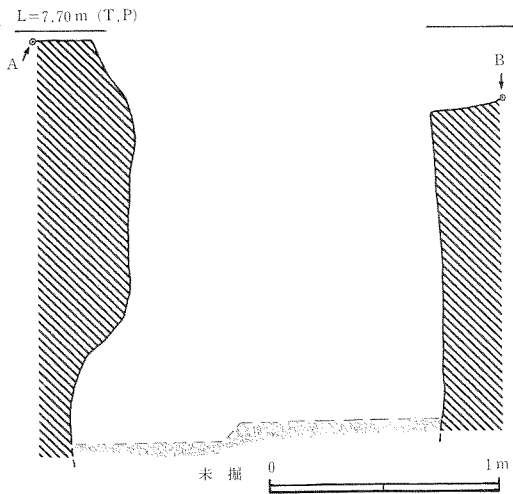


図5 SK01 (6 LGr.) 南北断面



写真5 SK01 (6 LGr.) 出土遺物

SK01(7PGr.) 北側は、近代以降の埋設管によって一部消失している。平面形は、隅丸の方形(1辺が約1.5m)であるが、柱穴など別の遺構が重複する部分もあり、不明確である。検出面から底部までの深さは、約2.3mである。写真6は、東西の断面であるが、壁面は内傾している。また、南側の下半分は、袋状を呈している。埋土は、ブロック状の土を含み、埋められた状況である。出土遺物は、17世紀後半から18世紀前半頃の陶磁器、かわらけ、瓦、砥石のほか、鼈甲製と思われる櫛と漆器碗片などが出土している。陶磁器には、瀬戸、美濃陶器、肥前系陶器、肥前系磁器、京焼、常滑あかもの、中国製染付磁器などがみられる。京焼は、上絵付丸碗で、高台内に「清閑寺」の印銘がある。他に、焼壺壺蓋、土師質手づくね小皿、播鉢片製円盤、土人形(恵比須)などが出土している。また、黄瀬戸大鉢は、6LGr.のSK01出土遺物と接合したことから、屋敷地の把握についても好資料となっている。本遺構も、規模、形態から地下室(穴蔵)として構築されていたものが、その後、廃棄用の土坑として転用されたものと思われる。



写真6 SK01(7PGr.)埋土断面



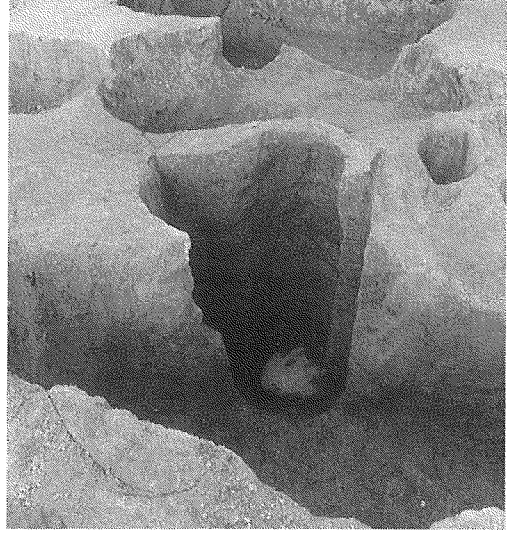
写真7 SK01(7PGr.)完掘状況



写真8 SK01(7PGr.)出土遺物



柱穴 礎石を有する柱穴が、10 数基検出された。出土遺物は少なく、時期の検証は、充分できていない。屋敷地における建物部分と庭および土坑、井戸等のつくられる場所が、一定の期間存続するであろうが、当調査区域より、さらに広い範囲が、同一屋敷地にあたると推定されるため、柱穴列が、どのような構造物を伴っていたかについては、現在のところ不明であり、他に多数存在するピットと整合させるのは、困難な状況となっている。



その他—火打石— 日本では、火打金と火打石を打ちつけることによって発する火花で発火させる方法は、現在のところ古墳時代後期にさかのぼるようであり、千葉県などで火打金が出土している。奈良、平安時代以降も、火打金、火打石の検出例があるが、近年になって江戸を中心とした関東地方の近世遺跡から、火打石の発掘調査報告例が目につくようになってきた。

写真9 P 20 断面

江戸時代の文献には、火打石に関する記述がいくつか知られている。『雲根志』（木内石亭著）には、「火打石は名産多し、国々諸山或は大河等にあり。色形一ならず、山城国鞍馬にあるは色青し、美濃国養老滝の産同じ。この二品甚だよし。伊賀国種生の庄に膏薬石あり、色甚だ黒し。（中略）水晶石英の類もよく火を出せども、石性やわらかにして、永く用いがたし。加賀或は、常陸の水戸、奥州津軽等の瑪瑙、大によし、駿河の火打坂にも上品あり」とある。また、『羈旅漫録』（滝沢馬琴著）では、1802年に旅をし、「京より伊勢までは、燧石はその色大に黒し。水戸より出る石のごとく潔白なるものさらになし。京の婦女江戸の燧石を見れば大にあやしむ。」と述べている。

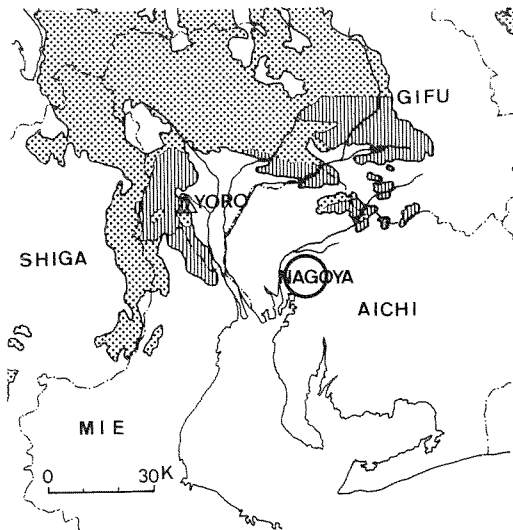


図9 美濃帯の中・古生層分布図

そして、『守貞漫稿』（喜田川守貞著）には、「燧石京坂は淡青の石を用ひ江戸にては白石

（チャートを含む中・古生代の堆積岩分布であり、縦稿は、養老地域の属する上麻生ユニット。）

を用ふ」とある。発掘調査によって、近世土坑などから出土している火打石の石材については、江戸および、その付近では、玉髓、石英が主体となるようであり、京都、大阪付近では、緑色を帯びたチャートやサヌカイトなどが使用されているようであるので、江戸時代の文献に記されたとおりの状況となっている。

豎三蔵通遺跡では、青灰色を呈し、1mm目ほどの縞目のあるチャートを主体とした火打石が出土した。火打石は、名古屋市内数箇所の遺跡からも、近世遺物を含む包含層などから検出されており、主体となる石質は当遺跡と同様である。これと同質のチャートは、養老地域で採取することができ、ここから尾張地方を中心に供給されていたのではないかと考えている。特定の石が流通している状況は、これまで当地方での考古学的な検出例がなかったため、ほとんど知られていない。

図No	調査次・出土位置	石質	重量(g)	共伴遺物
1	4次・位置不明	青灰色縞チャート	51.4	不明
2	5次・礎石1掘込	"	5.1	近世陶器など
3	5次・16Gr. ミゾ上層	灰緑色縞チャート	3.5	"
4	10次・8 OGr. SK 06	青灰色縞チャート	27.9	" (19C前半)
5	10次・8 PGr. SK 01	青灰色チャート	6.1	" (19C前半)
6	10次・8 PGr. SK 04	灰緑色チャート	7.2	" (17~18C)
7	"	灰色チャート	9.4	"
8	"	鉄製品(火打金?)		"

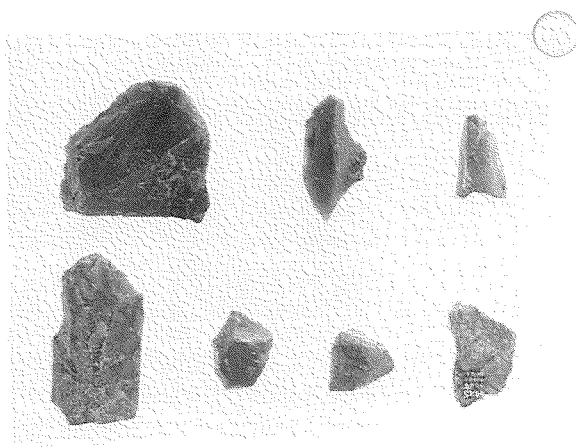


写真10 豎三蔵通遺跡出土の火打石

表1 豎三蔵通遺跡出土の火打石

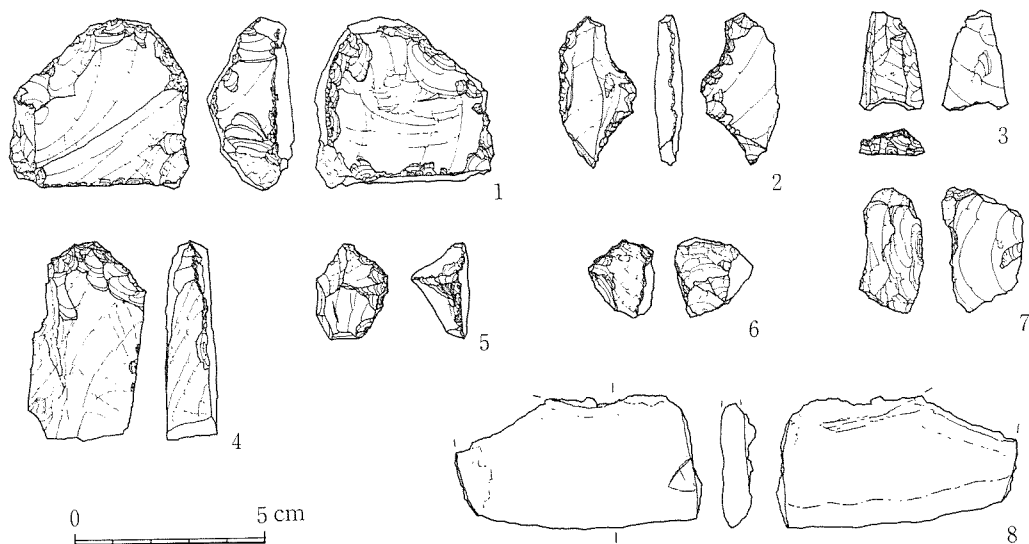


図10 豎三蔵通遺跡出土の火打石

### III まとめ

今回の調査区では、豎三蔵通遺跡の北東部分の一端を知ることができた。台地を形成する基盤の熱田層は、上部の黄橙色土が残り、平坦な地形であった。かつては、古墳時代の



写真 11 調査区全景

遺物を主体とした黒褐色土層が被っていたものと推定され、古墳時代（5～6世紀頃）の竪穴住居跡（1または2軒）とピットが検出された。古墳時代の竪穴住居跡は、3次調査区からも検出されており、当遺跡北側部分の状況を知る資料となった。なお、旧石器時代から弥生時代、また、奈良時代から中世に關係する資料は、ほとんど得られなかった。

遺跡の範囲は、江戸時代に、城下町内にあたり、付近は下級武士の屋敷地等になっていた。今回の調査では、17世紀前半の遺構、遺物がほとんどなく、17世紀後半頃から大規模

な遺構がつくられるようになった状況である。土坑から検出した火打石に関しては、近世の文献で、有名な産地があげられているように、江戸地域では、茨城県山方町などで産する玉髓を、また、京都地域では、鞍馬から上賀茂にかけて産するグレーチャートなどが火打石として採取されていたと想定される。現在のところ、火打石の生産、流通面からの研究は充分でなく、各地での分析の進展が待たれるところである。当地域でも、産業としての火打石生産、流通史からのアプローチは必要である。たとえば、養老地域に近い牧田川の濃州三湊（烏江、栗笠、船付）が流通に關係しているのか、また、使用される時代によって石質の差（産地の違い）があるのか、そして、供給先の範囲などの課題がある。

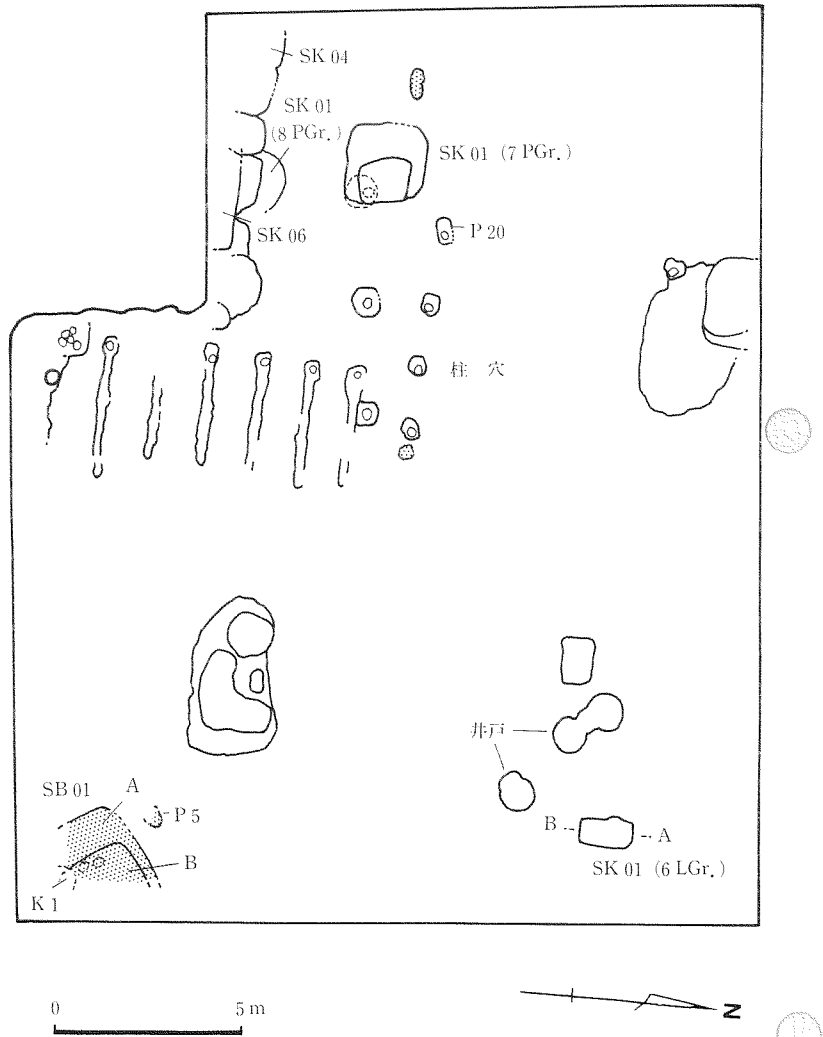


図 11 主要遺構位置模式図（アミ点は、古墳時代。他は、主に江戸時代）

## 参 考 文 献

1. 前川久太郎 (1978) 「道具からみた江戸の生活」 ぺりかん社
2. 高嶋幸男 (1985) 「火の道具」 柏書房
3. 三輪茂雄 (1985) 「NHK市民大学 「粉」の文化史～石臼からハイテクノロジーまで～」 日本放送出版協会
4. 益富壽之助 (1987) 「原色岩石図鑑」 保育社
5. 小林克他 (1987) 「東京都文京区 真砂遺跡」 真砂遺跡調査会
6. 高山優 森本伊知郎他 (1988) 「白金館址遺跡Ⅰ」 白金館址遺跡調査会
7. 山下昇他 (1988) 「中部地方Ⅱ」 日本の地質5 共立出版
8. 名和正浩 (1988) 「美濃国における河川交通 ー濃州三湊についてー」 『岐阜県博物館調査研究報告第9号』 岐阜県博物館
9. 小林克 (1989) 「東遺跡・上ノ台遺跡の火打石」 『東・上ノ台・道合久保前』 川口市遺跡調査会報告第13集 川口市遺跡調査会
10. 古泉弘 (1990) 「江戸の穴」 柏書房
11. 白神典之・増田達彦 (1991) 「堺における近世の陶磁器と土器ー遺跡出土の一括資料の紹介をかねてー」 『関西近世考古学研究Ⅰ』 関西近世考古学研究会

### 豎三蔵通遺跡

#### ー第10次調査の概要ー

1991年3月31日

編 集 名古屋市見晴台考古資料館  
名古屋市南区見晴町47番地  
〒457 TEL (052) 823-3200  
発 行 名古屋市教育委員会  
名古屋市中区三の丸三丁目1番1号  
印 刷 名古屋大気堂